

以前、私は福島県教育センターに勤務していたことがある。ここで働く魅力の一つに、小学校教員と中学校教員、そして高校教員が一緒に建物を苦楽をともにできるという点がある。なおかつ、様々な教科の教員がそろっている。

県教育センターには、専門性の高い高校教員がそろっている。そのレベルは、なかなか小中の教員では到達することができないものかもしれない。裏を返せば、専門性の高さが高校教員の生命線であり矜持であるということである。

授業がうまいかと言われれば、小学校の先生方のほうが上かもしれない。だが、授業はトーク・チョークだとしても、そのトークのレベルが違うのだと思う。進学校でもやっていけるだけの力量が備わっていると言える。

県教育センターでは、高校国語の指導主事とよく一緒に仕事をした。この方たちは魅力的な人物であった。ある方は、毎時間の授業の板書計画をすべて取ってあるというすごい人だった。専門性がある上に、このようなことをされたら、とても太刀打ちできない。以前も紹介したが、このすごい方が、国語の講座で自ら模擬授業をしたことがあった。私も生徒役で参加した。知的におもしろかったことを覚えている。自分も高校時代に、こんな授業を受けたかったなあと思ったものである。

高校国語の指導主事とは、席が隣なので、よく話をした。「まったく高校は。東大と東北大学に入ればいいと思って。昔と全然授業が変わっていないでしょ」などと言ったりしていたが、皆さん、すばらしい方であった。何の巡り合わせか、今ではお互いに校長会等で顔を合わせるのだから不思議な縁である。

現在の高校国語担当の指導主事とはいうと、高校の講座が始める1週間前に作成したテキストを私のところに、わざわざ届けてくれた。そして、講座の数日前に、また私のところにやってきて、講座で使う資料を置いていくのである。そもそも私は担当ではない立場なのだが、その指導主事は、そうやって気を使ってくれるわけである。講座が終わってから、私のところに来てくれる。そして、いろいろと話をしていく。その指導主事は、小中の先生方のように配慮ができる方なのである。

県教育センターに来る高校の指導主事が優れていると思う点の一つに、小中の教員の影響を受けるのか、徐々に変わっていくということがある。高校の教員は、一般的に皆さん偉いらしく、“一国一城の主”なのだそうである。それが一概にわるいとは思わない。もちろんいい面もある。高校指導主事の皆さんは、偉ぶるわけでもなく、気遣いを覚え、小中の教員のようになっていくのである。元々専門性が高い上に、気遣い等を覚えられては、またまた太刀打ちできない。

随分と偉そうなことを書いているが、私は、元々人に偉そうなことが言えるような人間ではない。まわりの人に教えてもらい、先輩に諭され、何とかかんとか、ここまでやってきたような人間である。正確に言うと、気づいていながらやらない、わかっていながら行動しないタイプであった。それでも、今までの教員生活によって、私自身が少しずつ変わってきたように思う。

私が現在勤務する梁川高校にも、気遣い等ができる先生方がたくさんいる。偉そうにする方はいない。どちらかというと小中に近いのかもしれない。それが、教科指導面でも生徒指導面でも、あるいは保護者対応でも、いいほうに出ているように思う。

(次号に続く)